

修士論文（要旨）
2016年1月

アカデミック・ジャパニーズ能力の形成と課題
—日本語学校コミュニティで学習経験のある外国人大学生への調査に基づいて—

指導 宮副ウォン裕子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
214J3004
高橋秀介

Master's Thesis (Abstract)
January 2016

Foreign University Students' Processes of Academic Japanese Language Acquisition:
Focusing on Students Who Graduated from Japanese Language Schools

Shusuke Takahashi

214J3004

Master's Program in Japanese Language Education

Graduate School of Language Education

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Yuko Miyazoe-Wong

目次

第1章 はじめに

- 1.1 研究背景 1
- 1.2 研究目的 2

第2章 先行研究

- 2.1 アカデミック・ジャパニーズ 4
- 2.2 日本留学試験 6
- 2.3 学びの共同体 7
 - 2.3.1 実践共同体 7
 - 2.3.2 コミュニティへの参加 7
- 2.4 日本語学校と大学との双方の視点 8

第3章 日本語学校コミュニティの現状

- 3.1 日本語学校の進学準備体制 10
- 3.2 日本語学校での日本語使用環境 11

第4章 調査概要

- 4.1 調査対象者 13
- 4.2 調査方法 14
- 4.3 分析の枠組み 14

第5章 アカデミック・ジャパニーズから見る分析

- 5.1 日本語学校コミュニティでの学び 17
 - 5.1.1 日本語の基礎能力 17
 - 5.1.2 大学の学習に必要な知識 21
 - 5.1.3 スタディ・スキル 25
 - 5.1.4 日本語学校コミュニティ 29
- 5.2 大学コミュニティでの学び 34
 - 5.2.1 大学で必要な日本語 34
 - 5.2.2 スタディ・スキル 38
 - 5.2.3 大学コミュニティ 42

第6章 総合的考察

- 6.1 学習者主体 46
- 6.2 大学の学習につながる日本語能力 47
- 6.3 日本語学校コミュニティから大学コミュニティへ 47

第7章 まとめと今後の課題

- 7.1 まとめ 49
- 7.2 今後の課題 49

参考文献

添付資料

稿者は以前勤務していた日本語学校の卒業生から、大学教育に対して満足している点と不満な点を聞く機会があった。彼らの意見を聞いたことにより、日本語学校で行われている大学進学のための日本語教育が、大学での学習の際にどの程度役立っているのか、日本語学校から大学に進学した留学生の中で、大学という新しい学習環境に適応できる留学生と、そうでない留学生との違いは何なのかという疑問を抱くようになった。日本語学校は大学に進学する留学生の橋渡しの機関としての機能が十分ではなく、大学の学習で必要になるアカデミック・ジャパニーズ(以下 AJ)を適切に身に付けることができないことが原因の 1 つになっているのではないかと考えた。これが本研究のきっかけとなった。

本研究では、日本語学校から大学に進学した留学生を対象にインタビューを行い、留学生が日本語学校と大学の 2 つの異なるコミュニティでの学びを通して身につけた留学生のアカデミック・ジャパニーズ(以下 AJ) 能力を調査する。1) 留学生にとって日本語学校から大学へと所属するコミュニティを移動した際に、日本語学校で獲得した AJ 能力が大学の講義でうまく活用されているか。2) 留学生自身や日本語学校が直面している AJ 上の課題は何か。3) AJ 能力を身につける際の日本語学校コミュニティが抱える問題点と改善点は何か。考察結果から、留学生自身に直面している AJ 上の課題について検討した。

本研究における作業枠組みとしては、Lave and Wenger (1991) の実践共同体の概念を援用し、日本語学校や大学での学びを実践コミュニティとして捉える。そのコミュニティ分析の枠組みとして、Breen(2001) の 4 層モデルを援用し、その 4 層目の「コミュニティへの参加とアイデンティティ」の中の、「以前所属していたコミュニティ」を「日本語学校コミュニティ」、「現在所属しているコミュニティ」を「大学コミュニティ」とした。その枠組みの中に、堀井(2003)及び、門倉(2006)が述べている AJ の 3 要素を参考にし、独自の作業枠組みを設定した。各コミュニティ内でどのような学びが行われ AJ 能力が形成されたのかを、上記で述べた AJ 能力の視点を用いて分析・考察を行った。

考察の結果、次の点が明らかになった。

1) 今回の調査対象者は日本語学校での学習を通して、基本的な日本語能力だけでなく、文章の概要を早く正確に把握する能力、論理的な文章を作成する能力等、大学に必要な AJ 能力が部分的ではあるものの身に付いており、それらの能力は大学での学習に役立てられている。特に小論文の練習や他者との議論のような産出型の日本語での活動に慣れることにより、自分の考えを表現することが重視される傾向がある大学での学習活動に移行しやすいことが明らかになった。さらに、日本語学校で覚えた社会的な知識は、大学の学習活動で発信を行う際に有効であり、大学で通用する AJ 能力の助けになっていることが明らかになった。

2) 日本語学校によっては日本留学試験の対策を重視するあまり、受容型の授業に比重が置かれ、産出型の授業がほとんど行われていない学校も存在し、産出型の AJ 能力の身に付ける機会を毀損している留学生もいることが明らかになった。しかし、試験対策の学習自体は AJ 能力の習得にも影響を与えており、大学の学習において役に立つ面もあることから、日本語学校の学習で受容型と産出型の練習のバランス及び、適切に連動されていることが AJ 能力形成の際の重要な鍵と言える。

3) 日本語学校では、時間的な制約や多様な学習者が存在するため、大学に必要な AJ 能力をすべてカバーするのは不可能である。しかし、読解や議論を通して論理的かつ批判的

な思考力を養う訓練をすることにより、日本語学校で学んだ限定的な AJ 能力を大学で学ぶ AJ 能力に応用しやすくなると言えるだろう。日本語学校では教師が主導的に授業を行うため、大学教育と比較すると留学生自身が授業内で自主的に活動する機会は少ない。今後は日本語学校で、細川(2007)が言及した「学習者主体」型の授業活動の機会を増やし、学習者相互の向学心を刺激すれば、より高次の AJ 能力の習得が可能な実践共同体になれるであろう。そして、留学生自身が活動を通して自分で考え、自主的に学んでいくことは、三宅(2006)が述べた「ことばの教育」にもつながるだろう。

今回の調査では、調査対象者の人数が少なく、その属性も限定されていたため、AJ 能力の形成や日本語学校の問題点についての結果は一部分にすぎない。今後は、非漢字圏の留学生を対象に同様の調査を行うとともに、留学生と日本人学生の AJ の形成と課題の比較を行うことも視野に入れ、この研究内容を深めていきたいと考える。

【参考文献】

- 池田玲子、館岡洋子 (2007) 『ピア・ラーニング入門』 ひつじ書房
- 伊能裕晃 (2004) 「日本語学校における就学生支援—必要となる認識、活動、組織についての提言—」『留学生教育』 9, 169-180
- 加賀美常美代、小松翠 (2013) 「第12章 大学コミュニティにおける多文化共生」『多文化共生論 多様性理解のためのヒントとレッスン』 明石書店, 265-289
- 門倉正美 (2002) 「日本留学試験の問題点(2)—「公開用問題」の分析—」『横浜国立大学留学生センター紀要』 9, 横浜国立大学, 93-107
- 門倉正美 (2006) 「〈学びとコミュニケーション〉の日本語力 アカデミック・ジャパニーズからの発信」『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』 ひつじ書房, 3-20
- 邱焱、大西好宣、邱立 (2009) 「就学生サポートの改善に向けて—中国人就学生及び日本語学校関係者に対する面接調査から—」『留学生教育』 14, 留学生教育学会, 83-92
- 林さと子 (2005) 「日本語学習の多様性と個別性—第二言語習得研究の視点から—」『津田塾大学紀要』 37, 津田塾大学紀要委員会, 25-41
- ボイクマン総子 (2013) 「初級前期からのアカデミック・ジャパニーズ教育—初級前期の口頭発表の実践—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』 5, アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会, 11-19
- 細川英雄 (2007) 「第2章 日本語教育における「学習者主体」と「文化リテラシー」形成の意味」『変貌する言語教育 多言語・多文化社会のリテラシーとは何か』 くらしお出版, 27-46
- 堀井恵子 (2003) 「留学生が大学入学時に必要な日本語力は何か—「アカデミックジャパニーズ」と「日本留学試験」の「日本語試験」を整理する」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』 1, アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会, 113-122
- 三代純平 (2009) 「コミュニティへの参加の実感という日本語の学び—韓国人留学生のライフストーリー調査から—」『早稲田日本語教育学』 6, 早稲田大学大学院日本語教育研究科, 1-14
- 三宅和子 (2005) 「留学生・日本人大学生のアカデミック・ジャパニーズとは」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』 1, アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会, 101-112
- 三宅和子 (2006) 「「ことばの教育」は何をめざすのか—アカデミック・ジャパニーズの地平から見えてきたもの—」『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』 ひつじ書房, 189-204
- 山下隆史 (2005) 「第1章 学習を見直す」『文化と歴史の中の学習と学習者 日本語教育における社会文化的パースペクティブ』 凡人社, 6-29
- 李麗麗 (2011) 「中国人大学院留学生のアカデミック・インターアクションに関する調査—正統的周辺参加から十全的参加への過程の分析と考察—」『桜美林言語教育論叢』 7, 桜美林大学, 17-31
- Breen, M. P. (2001). *Learner Contributions to Language Learning*. New Directions in Research. London: Longman.
- Lave, Jean and Wenger, Etienne (1991) /佐伯胖訳 (1993) 『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』 産業図書